

の所談全く此門に當る。次に直行機とは六識の起念を觀せず、超えて八識元初の本迷を觀するが故に、教道に據らずして直ちに行道證道を修するにあり、靈知の入道即ち當門にあり、我朝山門に於ける惠心檀那の兩流は實に此の二の止觀を祖述するにあり。

根本大師凌萬里蒼波、值行滿座主、從因至果、教相爲本、立文止次第相承、值道遂和尚、從果向因、觀心證道實義、稟承也。於本朝慈惠大師比迄、此兩箇相承一人傳、而慈惠大師御時、惠心檀那兩先德御座、檀那先德行滿相承分授、惠心先德道遂相承本覺法門授。

(止觀見聞上左一丁)

後に解行未分、本住不下機に就くときは、即ち上々利根直入果海の本性にして、天真獨朗本有の止觀と云ひ、又佛祖一言の一心三觀と云ふ、是れ彼の兩流の終歸本門入道の極致なり。

尊海云、櫻梅桃李形誰所造、只是天真本法理體、青黃赤白色、誰所染、亦是獨朗三智用矣。

或先德云、諸佛不說、祖師不傳、不聞一句法門、不斷一毫惑、只青陽朝花開萬榮、榮亦

楓葉秋夕、梢増再入紅矣、是本來法爾法體而言、天真獨朗本有止觀也。

(止觀見聞上丁十一右)

此の第三天真獨朗觀は、四明の未だ云はざる所、然も彼は亦第二重をも云はざる師にして、只初重の妄心觀を以て、天台を中興せしなり、是を以て靈知真心無念成佛を斥する、本より怪むに足らざるも、之れ猶自家の宗とする、台家の面目を毀損するものに非ざるなき歟、然るに此に注意すべきは、靈知は台家の第二重に位し、彼は更に天真獨朗觀を珍重せば、性起の趣入に勝れるにも似たるものあること、是れなり、今少しく此が交渉する所を研究せんか、彼の禪に於て既に二種あり、云く天真自然と靈知不昧となり、若し之れを華嚴に求むれば、即ち一心眞性の全揀と全收の二門なり。

然此教中以一眞心性對染淨諸法、全揀全收、全揀者如上所說、但剋體直指靈知、卽是心性、餘皆虛妄云云、全收者染淨諸法無不是心、乃至此心現起諸法、故法々全卽眞心、如入夢所現事々々皆人。

(都序上卷丁四十左)

然れば則ち全收の一心は諸法緣起の自體、此の緣起の際に於て入道を示し、全揀は

靈知を以て性起の趣入と爲す、然して華嚴の法門は唯心緣起を宗格と爲すが故に、觀道の至極は靈知にあることを知るべし、加之緣起の至極に就て、一塵の觀法あるに於てをや、之れに反して法華の實相は色心不二を極致と爲すが故に、天真自然を以て宗極と爲すなり、之れ全く兩家教格の相反するより來る者にして、その高下を論すべき性質の者にあらざるなり。

抑々觀門の高下を云々するもの、既に實行的ならずして教義的なり、教義に滯るもの焉、實行門を議論するの資格を有せんや、宜しく退て自家本領の觀道を修練し、切實に之れを味ふに如かざるなり、然も吾人をして強て之れを云はしめんか、十界融通眞妄本有は台門性具無作の法門にして、果上顯現妄體本眞は華嚴法界緣起の教義たれば、兩一乘の談、誠に兄たり難く、弟たり難く、畢竟するに秘密一乘の所詮金胎兩部の淺略とも謂ふべきもの歟、理曼荼羅なるがに故十界輪圓を説き、智曼荼羅なるが故に果海融通を説く、故に若し夫れ智を以て主とするときは、華嚴は法華の上にあると云ふべし、即ち野山大師の十住心論に、第八如實一道心(法華)、第九極無自性心華嚴と次第するものは是れなり、又若し理を以て主とするときは、法華は華嚴

の上に位すべきや必せり矣。

## 第二章 斷惑論

### 第一節 斷惑の要旨

#### 第一項 四種斷惑

夫れ斷惑證理は佛教の根本的生命なり、若し微妙の眞理を獅子吼し、單に宇宙の本體現象を説明するに止まらんか、或は世の所謂哲學なるものとは云ひ得べし、然れども佛教としての宗教的生命を得るや未だし、故に宗教を標榜せる佛教たるもの、飽迄其の理想に向て出發し、努力し、修養して、斷惑證理途に之に合致するの道を説かざるべからず、而して其の修養の方法論たるものは實に觀法是れなりとす、然れば則ち性起觀、緣起觀悉く皆斷惑證理の爲めなるのみ、何となれば斷惑證理の結果、即ち理想に到達し、理想此に顯現するがゆへなればなり、是を以て修養の方軌たる觀法は如何にして斷惑すべきかを説き、斷惑論は如何なる惑障を、如何なる位次に

於て如何に頓漸漸斷すべきかを論究するにあり、然して今華嚴一家の斷惑論を述ぶるに當り、先づ『華嚴經』中に蘊蓋せられたるものを、大別すれば四種あり、曰く就證、就位、就行、就實是れなり、之れ一家斷惑の根柢にして、皆之を講述敷衍するに過ぎずと云ふも、強ち過言にあらざるなり、就證とは十地品に説く所にして、小相品に都率天子が地獄より出で、都率天に生じ、現身に便ち十地の離垢三昧前に至ること、を説くもの、是れ十地の斷證にして、比證相對するものなり、即ち十地以前は比觀比量智を以て推測し眞理を證するも、未だ之を現實に證することを得ざるに反して、十地已上の位に進むときは、眞實無漏智を以て眞如を直觀し眞空の證りを得るを云ふ、就位とは三賢品に説く所なり、十信は未だ菩薩の不退位にあらず、初住已上を正しく菩薩の位と爲す、故に初住已上より斷惑を論ずることを得るなり、之れ行位相對にして、今は行につかず専ら位に就きて説くを云ふ、就行とは賢首品等に説く所なり、十信は行にして位にならず、而して十信の終心は實に行の満足せし所なれば、行不行相對して斷惑を説く、之れ即ち一乘不共の妙法たる信滿成佛是れなり、就實とは本經の奥旨に依るものにして、證道眞實門なり、之に對して前の三を教道施

設門と云ふ、此の證道門より云ふときは、一法として法界家の實徳ならざるものなく、法界の功徳を離れて別に説くべき惑障の體性あるなく、從て斷すべきの法あることなし、只是れ本來毘盧舍那法身の外なきなり、是れ實に小乘、始教に於て、十煩惱を以て根本體性となし、終教に於て根本無明を以て一切煩惱の體性として、所證の功徳の外に別に斷すべき法の體性を認めて論究するものとは、大に異なる所あることを記憶せざるべからず。

## 第二項 行布斷惑

行布斷惑に二種あり、寄顯と三生是れなり、初めに三乘寄顯說とは餘教に説く所の斷惑說に、全く同じ、或は大に同じで、之を説くものなり、先づ始教に於ては障に二種あり、煩惱所知是れなり、此に各々分別俱生あり、即ち見斷修斷なり、此の見修に亦正使習氣の二種を分ち、正使の中に更に現行及び種子を開く、而して菩薩五位に修證す、此の教に於ては十信を立て、位と爲すがゆへに信住行向地妙の五十一位を攝す、若し等覺を別開するときは五十二位なり、二に終教の意に依るときは、菩薩の階

三生斷惑  
脱

級は五位に依らず、住行向地妙の四十一位を建立し、等覺を別開せず、而して障に煩惱所知を分つも、分別俱生を區別せず、地前に煩惱の現行を伏し、初地に煩惱障を全く頓斷す、所知障の麤分は二地已上乃至金剛道に漸斷し、其の細分と并に二障の習氣全く盡きて、解脫道の滿心に佛果現前すと説く、次に三生斷惑説とは一家不共の談にして、見聞解行證入の三生に就て斷惑を説く、先づ初めに見聞生は十信前の一乘見聞の一生を云ひ、解行生は十信已去の修養時代にして、解行満足して證入果海位に至るを云ふ、是を以て見聞生に在りては伏斷共になく、解行生に於て漸伏し、證入生に於ては一斷一切斷するものとす、『孔目章』卷三七丁 參照すべし。

第三項 圓融斷惑

圓融斷惑は一家斷惑説中の生命を爲すものにして、他家の未だ曾て談せざる所の妙談なり、即ち不斷而斷にして、若し體性に就て論せんが、本より自性清淨法身の外なきがゆへ斷すべきの法あることなしと雖、其の用に就く時は、煩惱なるものは、豎に三世を徹貫する甚深のものなるのみならず、横に十方一切の法を障ふるがゆへ

に廣大のものなりと云はざるべからず、是れ實に法界所障の法は一即一切、主伴具足する所のものなれば、彼の能障の惑障亦一障一切障なるべきの道理明かなり、されば圓教に於て斷惑を口にせんか、即ち正使習氣現行種子等の分類等を立てず、直に一斷一切障を標榜す、故に迷を談すれば一迷即一切迷とし、成佛を云ふときは一成一切成、一得一切得となし、惑を論すれば則ち一障一切障と爲す、而して其の源流に溯るときは、正しく本經にありて存するものなり。

一障一切障の文

一斷一切斷の文

一成一切成の文

普賢品云、佛子菩薩摩訶薩、起眞志心、則受百千障、(舊經二十四の丁)  
小相品云、若有衆生得聞此香、諸罪業障皆悉除滅、於色聲香味觸內、有五百煩惱、其外亦有五百煩惱、二萬一千欲行煩惱、二萬一千恚行煩惱、二萬一千癡行煩惱、二萬一千等行煩惱、皆悉除滅。(舊經三十三丁九)

性起品云、如來身中悉見一切衆生發菩提心修菩薩行、成等正覺、乃至見一切衆生寂滅涅槃、亦復如是、皆悉一切以無性故。(舊經三十六丁右)

華嚴諸祖此等の經文に對する釋體を見るに、何れも皆普賢品の文は一障一切障を説き、小相品の文は一斷一切斷を説き、性起品の文は一成一切成を説けるものとす、

普賢品に對する賢首の釋意

先づ普賢品に關する賢首の釋を見るに、

雖諸煩惱皆悉遍障一切聖道、然瞋一種親障菩薩大悲攝物、是故偏舉於瞋、以例餘惑、又釋以瞋障最重、故偏說之、決定毘尼經中菩薩寧起百千貪心、不起一瞋、以違害大悲、莫過此、故菩薩善戒經亦同此說、乃至一切頓障、又以所障法界如帝網重々、會能障同所障亦皆無盡、故起一瞋成百千障、理實無盡。 (探玄記卷十六丁二)

瞋恚最重の故に舉げて餘惑を例す

他家は一體多用說今家は一障即一切障

之れ煩惱中、瞋恚最重の故に且く其の重きものを上げて、餘惑を例せしむるものとなし、而して一障一切障の道理を説明して云く、所障の法界實に重々無盡の法なれば、能障も亦之に同じく一即一切の義を成じて、一障一切障となるものなりと云へり、即ち普賢品の釋意は、彼の諸教常談の一の瞋恚に多不善の用を具すると云ふ一體多用說とは異にして、一煩惱起れば他の一切煩惱起るものなることを知るべし、而も亦經文中既に明に其の意を漏らせるものあり、即ち一瞋心を以て通じて五位を障ふと云ひ、或は増上貪恚邪見障を生ずと云ふ等、決して一の瞋用に就て云ふの言にあらざるを知るべし、次に小相品の文に關しては、至相の『孔目章』に云く、

依小相品說斷惑分齊、一斷即一切斷、由彼華嚴經文云、內外各有五百煩惱及八萬

小相品に對する至相の釋意

四千煩惱、普滅非別、故得知也。

(孔目章卷一丁四)

或於此一身中、即斷八萬四千煩惱、自分勝進皆悉具足、兼及自他、俱證十地、離垢三昧、唯除受體一時。

(孔目章卷一丁四)

一斷一切斷

と云へり、其意今家の斷惑たるや、一斷一切斷にして、所謂普滅非別なり、然らば則ち一身中に於て斷惑を論ずるは勿論、又位に約して云ふも、自分勝進分盡く具足し、敷て自他に及ぶの義なりとす、賢首其の意を承繼し、且つ其の理由を述べて云く、

此諸煩惱皆悉除滅者、現種使習一切皆盡、以普滅非別故、何位滅者通五位故、云何

滅者如虛空、故本來盡故。

(探玄記卷十六丁七)

賢涼二祖の惑性說

と云へり、即ち普滅非別を以て圓教の斷惑を語り、且つ其理由を述べて惑なるもの元來實體あるにあらざるがゆゑ、虛空の如く、其の自性より云ふときは元より無性の法なれば、惑の障ふるものなく、本來盡滅のものなりとす、故に清涼も『疏鈔』四十八丁には、煩惱に就きて其の數を一々列舉して後に云く、了知如是、悉是虛妄、と云ひ、又之を敷說して、能滅謂了惑本虛、居然不生、故といへるもの、又此の意を顯はせるものと云ふべし、性起品の文に關しては、賢首之を釋して曰く、

或云若圓教即一切衆生、並悉舊來發心亦竟、終行亦竟、成佛亦竟、更無新成。

(探玄記卷十六<sub>六十四</sub>)

性起品に對する賢首の釋意

と云ひ、一成一切成の義を示せり、而して『華嚴問答』上<sub>八丁</sub>に問答を設け、一切成の義を明晰に顯はせり。

問一人修行一切皆成其義云何、答此約緣起之人說故、一人即一切人、一切人即一人故、修言亦然、一修一切修、一切修一修故、同得云也云云。

上來諸祖の釋義に就て見るに、惑障に於ては、諸教の一體多用說と其の趣を異にし、一障起れば他の一切煩惱起るてふ一障即一切障を説き、又斷惑を論せんか、一斷一切斷にして普滅非別たり、又成佛を談せんか、一成一切成にして一人成佛すれば一切人成佛するの理なること明なり。

教判上より見たる斷惑

華嚴斷惑の要旨大略此の如し、然して今更に教判の眼光を以て論せんか、三乘等の諸教と雖、若し其中に圓融的の一斷一切斷の義あらんか、之れ別教中のものなり、然るに若し行布的斷惑ありとせんか、其義の何れにあるを問はず、之れ盡く三乘教義なりと云はざるべからず、又若し同教一乘の見地に立ちて之を論せんか、攝方便及

び所流所目は共に同教一乘と爲すが故に、三乘教に説く所の斷惑分齊盡く取りて同教一乘中に入るべきこと明なり。

### 第二節 斷惑發展論

#### 第一項 世親の斷惑論

華嚴一家に於ける斷惑論の嚆矢を爲すものは世親の『十地論』是れなり、既に教理編中に説明せしが如く、世親は『華嚴經』十地品の別行たる『十地經』を逐條的に釋するに當り、六相圓融に就て、自家の見解を發表せしのみならず、斷惑に關しても亦更に大に論ずる所あり、今其の根本たる『華嚴經』二十三卷十地品を見るに左の文あり、

其性從本來、寂然無生滅、從來已來空、滅除諸苦惱、遠離於諸趣、  
等同涅槃相、無中亦無後、非言辭所說、出過於三世、其相如虛空、  
とあり、又十地品の別行たる『十地經』には、  
自性常寂滅、不滅亦不生、自體本來空、有不二不盡、遠離於諸趣、

本經に於ける非初中後の文

世親の釋義

等同涅槃相、非初非中後、非言詞所說、出過於三世、其相如虛空、  
 とあり、之れ『十地經』は菩提流支等の譯にかゝり、『華嚴經』は佛陀跋陀羅の譯にかゝるがゆゑに、譯文に少しく異なる所ある所以なり、然れども其の義に於ては乖隔する所なし、今世親は『十地經』によりて論を造り、此の偈を釋するに、智は其の自性本より煩惱を離るゝがゆゑ、先きに染ありて後時に於て離るゝにもあらず、自性常に寂滅なり、又此の智は涅槃にも住せず世間にも滯らざるがゆゑ、衆生を利益して盡きず、然も出世間の法なるがゆゑ、不滅にして不生なりとし、次に此の智相に同相不同相の二種ありとし、自體本來空、有不二不盡の二句を以て同相を明し、此中自體空を總とし三種空を別解脱とす、而して遠離於諸趣已下の六句は不同相を明し、此中に於て一何處得解脱、二如何解脱、三云何觀、四云何信、五云何解脱の五種解脱となす、其中第二の云何解脱と標して、等同涅槃相非初非中後の二句を釋するもの、正しく斷惑を論するものなり、『十地論』に云く、

云何解脱者、偈言等同涅槃相、世間涅槃平等攝取故、非如聲聞一向背世間故、此旨盡漏、爲初智斷、爲中爲後、非初智斷亦非中後、偈言非初非中後故、云何斷如燈燄、非

世親の非唯初中後前中後取

唯初中後前中後取故如此解脱、

自ら圓融斷惑の義あり

即ち經の非初中後の文と、世親の之に對する非唯初中後前中後取の見解とは、一家に於ける斷惑論の根本にして、而も難解の文字なれば、諸師の極力解釋を試むるの名所たり、故に淨影等の諸師は淺解して三時次第して斷惑の功を積まざるべからずとし、華嚴家は緣生無性より進んで一即一切斷の圓融義を以て其の眞義を發揮するに至れり、實に世親本より有論者たり、然も今自性の寂滅を宣言せり、其の間空有不二の妙理を存するや明なり、此の理を以て非唯初中後前中後取に對せんか、豈に諸師の如く淺解に附し去るべけんや、況や又非唯初中後と前中後取を相望せんが圓融的の斷惑存すべし、此れ一家の着眼點なるべし。

第二項 惠遠の斷惑論

淨影寺惠遠師は『十地經論』を釋するに當り、初めに先づ經文を解釋し、次に之れが論文に註釋を施せり、隨て惠遠の意見の全面を伺はんには、經釋論釋、合せ取て比較し、研究せざるべからず、若し單に論釋のみに就て師を論せんか、其の正鵠を得ざる

經論に於ける惠遠の釋

や必せり師は『十地經』の非初中後に關して、左の如く述べたり、

對治離障、治必階漸、非定始終、故言非初亦非中後、正論其果斷淨在窮終、不得說言非初中後、今乃據果返談昔因、因時不頓、是故說言非初中後。

(十地義記卷二六十九)(經釋)

而して論文の非初智斷、非中後を解釋して云く、

非初獨斷中後亦然、三時通取、方能盡結、據果論斷、唯在後也、舉昔因故言非初中後也。

又論文の非唯初中後、前中後取を釋して云く、

言如燈炎、非唯初中後、前中後取者、依如毘曇一念有燒始終方盡、治結同然、若依成實一念不燒、相續方燃、治結亦然、若依大乘惠心明勝一念能斷、故經說言念々具足一切助道、於一念中尙能具足一切道品、何有不斷除煩惱、但續始方盡究竟、故今說言前中後取、如義正知各爲取也。

淨影は堅く三時の進修を執するがゆゑ、經文を釋しては治必階漸と云ひ、論を釋しては初め獨り斷せず、中後亦然り、三時通じて取り、方に能く盡すと云ひ、又大小乘の

真遠の三時進趣說

至相の緣起性說

### 第三項 至相の斷惑論

區別を論じて、毘曇は初一念より後々相續の間に斷すと云ひ、成實は初一念には斷惑の力なく、後々相續して方に斷すと説く、今大乘の慧心明勝にして一念に能く煩惱を斷じて一切の功德を具足す、されど其の究竟は始終相續の後にありと説明せり、之を要するに、彼れは三時進修して斷惑を成するの說、即ち論の非唯初中後前中後取を、唯初のみを取らず、非中後のみを取らず、等しく三時を取ると淺解して、單に時間的の一邊に限り、到底緣起相續して然も相由するてふ緣起即性起の域に達せざるものと云ふべし、賢涼二祖の之に向て破斥を加ふること宜なりと云ふべし。

華嚴一家に於ては如何に經論の文を釋するや、先づ初めに至相大師の见解を見るに、『搜玄記』三上四丁に云く、

論云、非唯初中後前中後取故者、此約智義、非約智事、義言智起惑次滅耶、又智生惑滅耶、同時耶、此名中、又惑滅次智成耶、此悉不可并有恒生不恒生、滅恒不滅等過故、初中後如緣起性取也。



此の縁起性なる一句、實に終實已上の通談にして、然も今家斷惑の義を釋するの妙句なり、即ち縁起とは因縁生にして妙有なり、之れ以て論の前中後取を解すべく、性は無自性にして真空なり、之れ以て經の非初非中後を釋するに適せり、是れ涼祖に至りて大に詳述せらるゝの張本を爲す所たり、又『孔目章』卷三、轉依章に云く、

圓教一即一切斷、亦如前說、斷智非初非中後取也。

と云へるもの、『孔目章』は主として經文のみに就きて述べしものなるがゆゑ、論文に及ぶことなくして、單に非初非中後取の經文を擧げしもの歟、之を要するに、至相の上に於ては文簡に過ぎ、吾人の容易く了解し能はざるものあり、之れ賢首清涼に至り詳述せらるゝ所以なるべし。

#### 第四項 賢首の斷惑論

賢首大師『探玄記』を述作せらるゝや、其の十地品は多く世親の十地經論を軌範として註解を加へられ、其間に自家獨特の學風、所謂性相融會の筆格、或は他師の謬解を矯正論破する底の筆格を存し、以て圓融の教義を遺憾なく發揮せられたり、彼の

不斷而斷  
の義を標  
榜す

斷惑論異解の根本を爲す經と論との文に就ても亦然り、即ち『探玄記』第十卷に於て、同相(空無性)不同相の二に分て、從來寂然空無性の故に斷すべき煩惱なく、又諸の苦趣もなく、本來滅除し遠離せり、之を同相と云ふ、又不同相には五相ありとせし、第一等同涅槃相は平等相なり、第二無中亦無後は斷惑相なり、第三非言辭所説は觀行相なり、第四出過於三世は轉依相なり、第五其相如虛空は解脫相なりとせり、これ既に『十地論』の論究せし所のものにして、然も明に平等相、斷惑相等と標榜せり、而して第二斷惑相に於て、經の非初中後を釋して、

論經名非初中後、謂於三時皆無斷善、方爲斷也。

と之れ實に經の非初非中後を釋するに、論の非初智斷亦非中後等の文の意を以て釋せられたるものにして、初中後の三時皆斷の義なし、然も亦方に之を斷と爲すと喝破せられたり、之れ圓教の不斷而斷、一斷一切斷の眞義を表顯せるの妙釋とす、而して此の文を詳釋するに、更に相翻門と相續門の二門を以てせり、今姑く之を述ぶることとせん。

相翻門とは、惑智相對して斷惑を論ずるものにして、初に非初中後に就ては惑を斷

相翻門は  
惑智相對  
に就く

する時、智先きに起て後に惑滅するや、又惑先きに滅して後に智生するや、將た亦惑智同時なりとせんや、若し夫れ此の前後同時の三時斷惑説を用るんか、惑智各々二の過失を招くべし、

三時斷惑  
説の過失

謂智有自成無漏過、不能滅過、煩惱有自滅過、不障聖道過、

(探玄記卷十十八)

智後同時各具四過、智後同時等者併出、二關言、智後者即前爲惑先滅、智後生耶、言

四過者、初明惑二、一惑自先滅過、由智未生而惑滅故、二不障聖道過、惑先已滅不礙

智故、智二過者、一智有自成無漏惑已先滅、智不斷惑故、二不能滅惑過、已先滅無

可滅故、言同時者、即惑智同時、亦有四過、智二過者、既與惑俱惑不干智故、自成無漏

亦不斷惑、惑二過者、既與智俱、故不障聖道、無智俱時、惑猶在故、後若斷時亦自滅。

(大疏鈔卷三十四中八十八)

右の中『疏鈔』は惑智を前後同時に配して其の過失を論せしものなれども、結局探玄記に出す過失の外に出でずして、當之を敷延し説明して明白ならしめたるものなりとす、如此初中後三時斷惑説、既に眞理に非すとせんか、如何なるもの之れ斷惑の義を成するや、曰く初中後の三時を執するも、惑を斷すること能はざるをすれば、

慈恩家の  
惑智同時  
斷惑論に  
對抗す

三時不可得の所に於て、自ら斷惑せらるゝの理現前すべし、喩へば燈の闇を破する時、三時破せざるが如し、故に此の三時に於て斷を求むるに得ず、而も亦方に斷の義を成す、此れ即ち不斷の斷にして、初中後に非すと云ふ所以なり。

後に前中後取とは、前中後三時の當體に於て、彼の非初中後を取るの謂なれば、決して三時に異して之を取るの意に非らず、例へば色の當體に於て眞空を取るべし、若し色を離れて別に求めんか、之れ斷空なり、今の理亦此に同じと云ふにあり。

如此論究し來る時は、忽ち法相家の正義たる同時斷惑説を破壊し去るべし、彼れ假令聖智現前すれば、惑種必ず滅すること、恰も秤の兩頭同時に低昂するが如しと主張すとも、既に述べしが如く、惑智同時に各々二過あるを云何せん、賢首喩を擧げ切に述べて曰く、

若同時者、智自生時、惑自滅時、不相由故、何成對治、如東家男生、西家女死、雖亦同時、

爾無相由、不成對治、

(探玄記卷十十八)

と、然は則此の相翻門は、要するに慈恩家の同時斷惑説を破すると同時に、自家の不斷而斷の圓教斷惑説を述ぶるものと云ふべし。

相續門は  
一智の三  
時相續に  
就く

相續門とは感智相對に約せずして、但だ一智の三時相續に就て斷惑を論ずるものなり、然らば何故に三時皆斷惑せざるや、唯過去は已に落謝するがゆへ斷せず、唯未來は未だ起らざるがゆへ斷惑せず、又唯現在も住せざるがゆへ惑を斷すること能はず、是故に三時皆斷の義なきなり、如此唯初中後の三時は斷の義なしと雖、前中後相續して求むる時は實に斷の義存するなり、是れ論に非唯初中後前中後取と云ふ所以にして、不斷の斷なり、故に論には特に唯の字を加へて緣起の三時にあらざるものは取らずとし、然も引き續きて前中後取と濫を簡ふの句を添へたり、之れ各別の初めを取らずして、緣起の初を取り、單の中を取らずして緣起の中を取り、各別の後を取らずして緣起の後を取るの意を表するのみならず、又緣起の初中後も、各別の初中後を離れてあるものにあらず、全く初中後に即したる緣起の初中後なり、故に「賢首探玄記」卷中十九に、此於初上取非初中上取非中後亦然と云へり、是れ簡なれども能く其意を盡せり。

惠遠の三  
時進趣論  
に對抗す

此の相續的の斷惑論は、實に淨影寺惠遠の三時進趣論に對抗するものと云ふべし、彼れの意、三時を別に取れば斷を成せざるも、三時を總じて取るときは斷を成すと

の意なり、然れども之れ各々の砂に油なくんば、云何に多く集むとも油なきに等しく、必ずや斷の義を成せざるべし、仍て緣起性の三時のみ能く斷の義ありと論ずる所以なり、故に賢首「探玄記」卷中十九に、諸教を比較して曰く、

依毘曇一念有燒始終方盡治結同然、依成實一念不燒相續方盡治結亦然、若大乘初教初念亦斷中後亦然、若依終教如緣起性三時俱不能斷、即由不作緣起方成不無斷、

といへり、其の毘曇成實の説明は全く十地義記に則り、又十地義記に大乘の説として述ぶるものは、始終未分なるを、今は始終二教に分判して彼を始教分齊とし、終教の緣起性の三時なることを明せり、然れども此の終教は終頓圓未分の通説に就きたるものなり、其の圓教別開の詳説に至りては、經疏の上に於ては且らく清涼に待ち、自家の義としては「五教章」下卷、斷惑分齊中に詳述せられたり。

已上の二門之を要するに、慈恩淨影二家の斷惑論を破斥し、自家の不斷而斷の義を表白するに外ならざるなり、即ち一切緣起の諸法、其の自性本より真空無性なれば斷の義なし、而も森羅の萬象は因緣生妙有のものなれば斷の義ありと云ふべし、是

れ初に大師釋して、「於三時皆無斷義方爲斷也」と云ふ所以なり。

第五項 清涼の斷惑論

清涼精要  
を極む

清涼の斷惑論は『演義鈔』三十四中丁八下七に於て見るを得べし、即ち廣く斷惑の義を明し、二祖の意を詳述して益々明晰を加へ、其の論精緻を極めたり、即ち至相の初中後如緣起取也の意を用て、巧に其の斷惑論を解釋し、又賢首の相翻、相續の義を全然襲用して、其の意を詳にせり、故に清涼に慊らざる普寂德門すら、已に左の如く述ぶる所あり。

演義鈔廣明斷惑其所釋與至相賢首所說稍有所異而推其所歸宿無復大違予竊謂清涼之異於二祖者猶如以銀換金乎匡眞之似於二祖者恰若迦羅迦之似鎮頭迦乎學者忽惑。

(五教章衍秘第五卷丁四十四)

然れば即ち清涼の斷惑論は別に發揮するところなきが如しと雖其説明に於ては少く左右なきにあらざるなり、今且く其の主なるものに就て説明すべし。

一、斷惑論を説明するに、緣起の言既に至相の上に在りと雖未だ之を以て詳く説明

緣起無性

を加へず、賢首大師は番僅に終教に依らば緣起性の如しと述べし迄にして、其他には多く之を用ゐず、然るに清涼は盛に緣起無性の言を以て、賢首の立てし二門に就て説明を加へたり、其二三を擧ぐれば左の如し、

謂三時相因俱無定性故、三時無斷由無定性方能斷惑故、云方說斷耳。

(演義鈔三十四中丁八十七)

上明非先後、俱爲顯無性、無性緣成則說斷結。

(同上丁九十)

明知無性無初中後、無初中後是無性故、方得成於初中後斷、此則因緣故無性、無性故因緣也。

(同上丁九十三)

大凡此の類なり、枚擧に違あらず、之れ緣起無性は終實已上の通談なるがゆへ、行門爲本の涼祖の特に盛に用ふる所なりと云ふべし。

二、慈恩家の斷惑論に對抗するや、賢首は初め論の喩を出して燈破闇三時不破と云ひ、次に『雜集論』第四、『涅槃』二十九を引證し、後に論文の非初非中後に合せしむるもの、決判を爲すの根本にして、表面は性相融會なり、然るに清涼は一に顯唯識二明順達三顯當宗と次第して性相決判せり。

融會と決  
判

經論性相の設否

三、經は性に約して非初中後と云ひ、論は性と相に約するゆへ非初非中後と云ひ、然も同時に前中後取と云ふものなりと論せり。

謂實教斷惑、必性相雙明、經文正顯證智、唯據甚深緣性不可說義、論主兼明斷義、故性相雙辨、非初中後、辨因緣無性是斷之不斷、前中後取、即不壞緣相是不斷之斷。

(同上九十一左)

長短二種の三時

四、清涼は初中後の三時に就て長短二種を立てたり、即ち發心を初とし、修行を中となし、成佛を後とする所の長時と、又見道を取りて初とし、金剛道を後とする所の短時とを區別せり。

就此三時後有二種、一約初心究竟通分三時、二約無間道中刹那之三時、經論并通此二。

(同上九十一右)

惡道を難破す

五、賢首已に遠公を破斥する所あれども、涼祖に至りては一層痛切を極め罵倒し去りて、又顔色なからしめたり、遠公「十地論」を釋して、初獨り斷するに非ず、中後も亦然り、三時通じて取て、方に能く結を盡すとあり、此の釋意若し夫れ初念に即斷し、後念に方に究竟すとせんか、毘曇の所謂一念に燒あり、始終に方に盡す、結を治するこ

と同じく然りと云ふものと、何の簡ぶ所かある、若し又初念に斷せず、積で後念に至りて、方によく斷すとせんか、成實の所謂一念に燒かず相續して方に燃ゆ、結を治すること亦然りと云ふものと、何の異なる所あらんや、彼れ一念に道品を具足すと云ふも、之れ何の所證ぞや、よしや一步を譲りて斷惑の義を成すと許すも、彼れは決して斷而不斷、不斷煩惱入涅槃の義を解せざるものと云ふべきなりと、痛切に論せられたり。

若云初念則能斷後念方究竟斷者、不異毘曇一念有燒始終方盡若云初念獨不斷積至中後方能斷者、不異成實一念不燒相續方燃勿失宗旨。

(大疏鈔三十四中九十三)

二祖説明の左右

六、賢涼二祖の相翻相續二門に於ける説明を見るに、賢首は已に説明せし如く、非初非中後、前中後取の二句を二門の何れよりも等しく取りて之を論究せり、然るに今涼祖は非初非中後を相翻門に屬せしめ、前中後取を相續門に屬せしめて論ずるの趣なり、所謂前者は據實通論、後者は據勝爲論と云ふべし、仍て今據勝門に則りたる二門、即ち惑智相對して非初非中後を解釋する所の相翻門と、智の三時に約して前

清涼據勝説に於ける二門の異

中後取を論ずる相續門とを比較せんか前者は空間的横的研究にして、後者は時間的豎的の論究なりと云ふべし、然り而して又前者は縁生無性、後者は無性縁生にして、相翻門は無性を主とし、相續門は縁生を主とするものと云ふべし、故に前者は斷而不斷、後者は不斷而斷にして、一は眞空を顯はし、一は妙有を主とす。

七然るに此の縁生無性、性相無碍の法門は、終實已上の通談にして、圓教に局るものに非らず、若し夫れ頓圓を別開せんか、一切理に契ふが故に無斷なり、一斷一切斷の故に無不斷なりと談せんか、之れ圓教の義なり、若し又本と斷あることなし、何ぞ無斷あらん、性本來寂寥言亡慮絶たり、説て斷と爲と云は、頓教の義なり、故に圓頓合論して左の如く云へり。

猶通實教、若依圓宗所斷之惑、一迷一切迷、一斷一切斷、無斷無不斷。

(大疏鈔三十四中九十四)

### 第三節 本末兩寺斷惑論

#### 第一項 東大寺派斷惑論

一即一切の義に就て猶研究の餘地あり

東大寺派は單純に縁起相由の二因に依り殊に事理無碍を以て一切を解決するにあ

華嚴各祖の斷惑説を見るに、惑障に於ては三乗教の一體多用説と其趣を異にし、一障起れば他の一切煩惱起るてふ一障即一切障を説き、又斷惑を論せんか一斷一切斷にして普滅非別たり、又成佛を談せんか一成一切成にして一人成佛すれば一人成佛するの謂なること明なり、然りと雖、一斷一切斷なる義は一人斷惑すれば一人斷惑するの謂なるか、將た又一人中に就て云ふべきものなる歟、即ち一煩惱を斷すれば之に屬する作用並に同類の煩惱は皆共に斷すると云ふ三乘的斷惑義にあらざるは疑ひなしと雖、少くも同類自類を問はず他の一切煩惱を斷するものなるか、次に成佛に於て一人成佛一切人成佛は因果二位に通じて語り得べき歟の問題は尙明瞭を缺くものあり、是れ後世我國本末兩寺の研究に待つ所ある所以なり、故に已下其主張する所に就て其要を述ぶべし。

華嚴一家標榜の旗幟たる事々無碍は、直に其の相狀を捕へて論せんか、縁起相由の道理に基き、其の體性より論せんか、法性融通の原理に因るものにして、敷ひて因陀羅微細、主伴具足等の義をも成立することを得るなり、然も最簡短に事々無碍の宗を成立するものは何ぞやの問に對するには、事理無碍を以て因と爲すと云ふを以

一斷一切  
斷は一人  
斷惑一切  
人斷惑の  
謂なり

て足れりすとす、即ち宇宙の森羅萬象たる事々物々が相即相入無碍自在なることを説かんには必ずや事理無碍の道理よりすべきものとす、之れ法性の理なるものは分齊あることなく、然も其の性不變なるが故に、事法と顯現するも少しも其性を改めざるのみならず、一事中に理を攝し盡してあまりあることなし、他の一切の事法亦皆然らざるものなし、故に理通する時即ち諸事亦事法に遍することを得て一切なるべきなり、是に於てか、若し夫れ斷惑成佛を論すとせんか、其義一にして一人斷惑成佛する時は一切衆生同く斷惑成佛すと云ふべきなり、之れ性起品の文並に賢首大師の之に對する釋、『華嚴問答』に於て明なりとす、即ち菩薩智を以て衆生の體性と爲すが故に、成佛せざれば止みなん、苟も成佛せば必ず一切衆生と同體俱成の成佛なり、斷惑せざれば止みなん、苟も斷惑すれば必ず一切衆生と同體普滅の斷惑なり。而して此の義を明に宣言するもの、實に禪爾ノ高弟泉州久米田寺盛譽の『華嚴手鏡』なりとす、即ち、

任法性融通之道理、就緣起相由之義門、顯生佛平等之本、演舉一全收之大義時、成佛者悟舊來本成故、必開與一切衆生同時作佛之智見、斷惑者覺舊來本斷故、必成

一成一切  
成は一人  
成佛一切  
人成佛の  
謂なり

與一切衆生同體不滅之斷惑。

と云へり、其他『見聞』にも一斷一切斷者、一人斷惑一切衆生斷惑云々と述べ、尙語を繼ぎて普賢品の「一障一切障約一人、小相品一斷一切斷約多人說等是也」と云へるもの、一斷一切斷は一人斷惑する時一切有情皆斷惑し、一成一切成は一人成佛する時即ち一切有情皆成佛するの意なりと云ふべし、然して之を立證するに、『華嚴手鏡』『纂釋』等、盛に華嚴問答の文を引用せり、今繁を厭はず一文問答上<sub>下</sub>を抄出すれば左の如し、

問此十身成佛、經云念々新々斷煩惱成佛、而不云住學地者其義云何、答若三乘教中三身成佛者、因時中住學地修諸行、至果時中住無學地無修學、一向果位一乘中佛、自他並同成故已成佛去、非唯住果地不修、因行或成佛與一切衆生、前々已成、後々亦成、十世九世無不成時、同一緣起因果故。

此の文一切皆成を證するのみならず、全衆生是れ全佛なりと雖、然も生佛の相を壞せざるが故に、新々斷惑し後々に成佛するも亦得たり、故に『五教章』に、與一切衆生、皆悉同時同時作佛、後々能、新々斷惑等と云へるもの、亦此意に外ならずとせり、然り

生佛の相  
を壞せず  
とせば斷  
未斷の別  
あるべし

而して生佛因果の二位を壊せざるの談は勢ひ三乗教に同じて斷未斷の別なかるべからず、若し夫れ斷未斷あらば隨て一斷一切斷の義成せざるを如何せん、此點に關し「纂釋」は説明して、

是即正明圓融門中普滅、但此普法理寄行布門時、不壞因果二位

(纂釋三十六丁)

と云ひ更に論點を進めて、「既寄行布門時、不壞因果二位故、尙有斷未斷之別者、何故圓融門談一斷一切斷乎」と云へり、蓋し其の意圓融門普滅の理を行布門に寄すれば、勿論三乗教に同じて斷未斷の別ありと雖も、圓融門の談は必ずや普滅非別ならざるべからずとするにあり、即ち斷感成佛共に圓融門より云ふ時は一人斷感成佛すれば即一切人斷感成佛し、行布門より云ふ時は三乗教所説に同するの謂なり、如此斷感成佛共に圓融行布を以て論ずるもの本寺派の學説なり、故に凝然大德は明晰に之を説明して其の範を示せり。

圓教斷感其相云何、答一乘斷感有其二門、一行布斷感、二圓融斷感、行布斷同三乗教。  
(法界義鏡卷下丁四)

圓融と行布の辨別

已上東大寺派學説の大綱を述べたり、之に對する高山寺派の學説如何、項を更めて次に紹介することゝせん。

### 第三項 高山寺派斷感論

夫れ單に法性融通の理性一味に據り、或は緣起相融の道理に則りて直に談すとせんか、一切諸法齊等なることを得るは勿論なれども、緣起圓融の諸義を考察し具足せざるものあるときは、其の斷定は往々不確實なることあり、彼の斷感成佛の二義に於て殊に然りとす、即ち二義は同一理を以て律すべきにあらすして、斷感論は宜ろしく次第行布門に依り、成佛論は宜ろしく圓融相攝門に依るべきものとす、是れ因門の中に於ては緣起幻有の衆生ありて未だ開悟せざるものあるに反して、果門の中に於ては普眼圓熟し已に佛性を開覺せしものゝみなるが致す處なればなり、是を以て斷感門は先づ自類相對を原則と爲すべくして、直に理を以て自他相對の義を推論すべきに非らず、故に斷感門の一斷一切斷の言たるや、煩惱の自類相對して一切斷と説き、亦行徳も自類相對して一切成と説けるものにして、其の意煩惱の

高山寺派は緣起圓融の諸義を考察し具不決定むるにあり、斷感は行布に依り成佛は圓融に依る



一斷一切  
斷は一惑  
斷すれば  
同類の一  
切惑を斷  
するの謂  
なり

自類相對して一種を斷すれば則ち餘惑を斷するものにして、初に一斷とは即一煩惱を斷じ、次に一切斷とは其れと同類の餘惑を斷するの謂なり、又行徳の自類相對して一種の行徳を成すれば、則ち餘の行徳を成するものにして、初に一成とは即一行徳を成じ、次に一切成とはそれと同類の餘の行徳を成するの謂なり、故に『華嚴經』小相品に、兜率天子從從地獄出聞此普法非直自身頓得十地亦乃毛孔香薰中令爾許衆生頓八萬四千煩惱皆悉除滅」と云ひ、香象大師曰く並是普法之勝力也と云へるもの、良に之れ八萬四千の煩惱一時に頓に皆悉く除滅するもの、豈に一切斷にあらずや、然も亦自類相對的にして無條件の一切斷にあらずや、明かなりとす、此の見解により明惠上人斷案を下して左の如く云へり。

言一斷一切斷者、於一切惑障中斷一種惑即斷一切惑障也、言一成一切成者、成一種行徳即成一切行徳也。  
(光顯鈔下十三右)

一成一切  
成は一人  
成佛の謂  
なるも只  
果門中の  
義

之に反して、若し成佛門の時、自他相對して一人成佛する時、一切衆生同時に成佛するなり、然れども之れ、因果門中の所説にして、決して因門中に於て論すべきにあらず、彼の性起品に於ける、一成一切成の如き、仔細に檢し來れば、其の然るを知るに

單に即  
一切を主  
張する三  
失

足らん、即ち性起品の一切成たるや、元來如來成菩提の義に十門あり、中に於て此は第五現因果門の説なり、此の門の大意は、一佛身中に於て一切衆生正覺等の義を成することを説く、故に一佛成道の時、一切衆生皆成佛するの謂にして、因位には未だ圓證せざるを以て、直に衆生に於て一人成佛すれば、一切人成佛するの義なりとすべからず、是を以て、成佛門の一人成佛する時、一切衆生同時に成佛するてふ語は、東大寺派と同じきも、意に於ては大に異なることを知るべし。

如此行布圓融の兩門を以て、斷惑成佛の義を截然區別あらしめ、小相品は只十地の益を得るに止り、未だ成佛せざるの分齊とし、性起品は圓證の佛に就くものとするが故に、此の兩門を影略互顯して、俱に即一切の義を表顯するものとの主張は、斷じて其の認諾を與へざるや、明かなり、而して斷惑論に就て本寺派と意見を異にする上人は、熱心に自説を主張するあまり、勢ひ之に向て其缺點を指摘せり、即ち、

恐有三不足失、一雖得總義未得別義失、二雖得能成因未得所成宗失、三於能成因中雖得少分未得全分失也。

(光顯鈔卷下十九)

と三失を擧げ大に辯駁を試みたり、其意に依れば、先づ第一に本寺方は總の義を得

と雖未だ別義を得ざるの失ありとは、元來賢祖が緣起を説明するに總別の二門ありて存す、若し之を區別せずして論せんか、到底其の正鵠を得るものにあらざるなり、彼の『華嚴問答』に、一人即一切人、一切人即一人、一修一切修、一切修一修等の義を説明するは、皆之れ總門緣起の義にして、六相十支等の別門緣起の道理を分別せざるものなれば、若し總門にては一人斷惑せば一切人斷惑すと云ふを得べきも、別門に就く時は未だ的確なる説とは云ふべからず、今此の斷惑の如き、既に緣起中の別門に屬すること別なるものに對して、何ぞ通漫に一人斷惑一切人斷惑の自他相對を説くを得んや、加之文章を讀下するに當りても、通別に注意を拂はざるべからざるものあり、假令ば彼の『五教章』の斷惑章圓教の下に於ける、所障法一即一切乃至彼能障惑亦如此と云へる如き、所障の法と云ひ、未だ所障の人とは説かず、隨て能障惑亦人に通せざるや本より其の處なり、又普賢品小相品の所説並に人に通せざるものなること文に於て明なり、若し夫れ之を思はずして何時も一即一切を主張せば、總別の義を知らざるの徒なり、第二能成の因を得と雖、未だ所成の宗を得ざるの失ありとは、東大寺派が引用する『探玄記』の文に就て查稽するに、彼の記第一卷第

五能詮教體中に出す十重教體中第七の事融相攝門解釋の文なれば、更に一多相即因陀羅法界の斷惑成佛等の別義を論せず、從て事理無碍を以て所因と爲して、僅に事々相融の義を成すと雖、未だ十々無盡主伴具足等の事々圓融の宗教に及ばざること遠しとす、第三少分を得と雖、未だ全分を得ざるの失とは、事々無碍圓融の根本原理に、一諸法無定相故、二唯心現故、三如幻事故、四如夢見故、五勝通力故、六深定用故、七解脫力故、八因無限故、九緣起相由故、十法性融通故の十種あり、此の十種即ち事々圓融の義を成す、然るに纔に理事無碍の一因を以て全因と爲し、事々圓融を成せんとす、即『探玄記』第四の文を引て證と爲すもの、彼文は是れ一多相容不同門中の一多、多中一の經文を解するの釋文なり、如此一因を以て全因と爲して、論證するもの、管見も亦甚しと極論せられたり。

本末兩寺の斷惑成佛論に就て、南都系統の學說に於ては、斷惑成佛共に同一典型を以て論究し去り、共に圓融門に於ては一人斷惑成佛すれば一切人斷惑成佛すと爲し、若し行布門よりせば、且らく三乘所說に同する邊ありと爲すにあり、之に反して、梅尾の學說に於ては、成佛門は圓融門に約して一人成佛すれば一切人成佛と爲し、

然も之れ因果門の説明にして佛果上現の所説なりと爲し、斷惑門は行布門に約して一人上に就きて、一惑を斷すれば一切惑を斷するの謂にして、自他相對するものに非らずと爲すものなること、上來本末兩寺の主張せし所にて明なり。

今此の兩派の學説を見るに、一は如來性起所見の位に就て論じ、果上顯現の法門なることを何處迄も確守せんとするの威貌あり、一は修因契果趣入の邊に就て語り、事理趣入を基礎として法門を説くの溫容ありと云ふべし、故に本經一部宣揚する脈絡に就て經旨を得るは本寺方其當を得たりと云ふべく、文に就き機に就て眞面目に研究するは末寺方其肯綮に當れりと云ふべし、即ち一は緣起門の理論を旨とし、一は事理門の實行を主として出發せしものと云ふべし、既に其の出發點を異にす、勢ひ其の到達點亦異ならざるべからず、然も其の結論の異なるものある所、理論に於ては本寺の高遠至妙なるを取るべく、實行に於ては末寺の用意周到に待つ所多きを知るべし、隨て一は事々無碍を飽迄標榜する所賢祖に親しく、一は趣入に重きを置く所涼祖に親しと云ふべし。

若し夫れ法性融通緣起相由の所因を以て事々無碍を成立し、此の事々無碍談を一

兩寺學説  
の批評

切法門に適用して本宗の大義を論ずる本寺系統の學説は、其説く處簡明直截にして、然も意高遠深邃なるものあるを覺ふるも、語足らざるの憾なき能はず、之に反して緣起に關する諸義を盡く所因と爲し、然も事々無碍談に於ても總別の區別を爲し、一々文を研究して法義を按排料理する末寺派の學説は、其説く處詳密周到にして、然も叮嚀親切を極むと雖意に於ては寧ろ淺しと云ふべき歟。

### 第三章 佛身論

#### 第一節 佛身説の梗概

華嚴に於ける佛身説たるや、通佛教に於て法報應の三身差別を談ずる者とは、全く其の撰を異にし、十表無盡を顯はさんが爲め、十身具足の毘盧舍那法身佛を以て、理想的佛身とし、教主と爲すにあり、されば彼の台家に於て、盧舍那を報身とし、毘盧舍那を法身とし、釋迦を化身とし、以て三身差別を談ずると共に三身相即を談ずるもの、或は法相家に於て、法報應三身の隔歷を説く如きにあらず、之れを『華嚴經』に徴

十身具足  
の法身佛

するに、六十經には略して盧舍那と云ひ、八十經には具に毘盧舍那と爲し、然も釋迦を以て直に毘盧舍那とも盧舍那とも稱せし所あれば、一佛體の異名にして、決して三身區別を認むべき餘地なきものと云ふべし、我國筑波山主眞が此の點に關して論評するもの頗る妥當なるを覺ゆ。

私云華嚴別教說十身不約三身、然約同教及三乘則非不辨三身之異、且說十身在、意顯無盡、若以義攝之亦不出三身也、荆溪斥云法報不分二三莫辨者以異難異也、但天台以毘盧舍那梵音具略爲法報之異者、蓋由有所聞乎、然違新譯經論勿爲定耳。

(五教章別解上三丁)

然らば、其の十身具足の法身佛とは如何なることを意味する歟と云ふに、此に二種ありとす、一に云く解境の十佛二に云く行境の十佛、是れなり、解境の十佛とは、衆生身、國土身、業報身、聲聞身、緣覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虛空身にして、大別すれば、衆生世間、器世間、智正覺世間の三になる、故に此を稱して融三世間の佛と云ふ、即ち三種世間融和して其間に毫も差別を認めざる圓滿無碍法界身雲の佛なり、是れ佛智を以て照す境界のすべてを總束して佛身とするが故に、山河大地も佛體なり、吾人

解境と行境の要旨

解境と行境の關係

迷界の生身も佛體なり、悟界の三身も佛體なり、されば、水の滾々と流るゝ音も、松吹く磬邊の風聲も、曉知らずる山鴉の鳴く聲も、妻戀ふ男鹿の聲も、猿啼も、吾人の言詞も、佛の說法も、皆一として佛法獅子吼ならざるはなきなり、又行境の十佛とは、菩提身、成正覺佛、願身、願佛、化身、涅槃佛、力持身、住持佛、相好莊嚴身、業報佛、威勢身、心佛、意生身、隨樂佛、福德身、三昧佛、法身、法界佛、智身、本性佛にして、因位の行力によりて種々の福智を具足する所謂修因契果の佛是れなり。

如此解境行境の二ありとせば、何れを以て所崇所歸とし、教主と爲すべき歟の疑問は尋ぎて來るべし、抑々此の二は體より云ふときは、不二なれども、義に就て論ずるときは、一は德により、一は智に依るが故に、寬狹の區別あり、即ち解境は融三世間なれども、行境は智正覺世間に局るべし、而して今其の主とする所を擧ぐるときは、解境の十佛を以て所崇とし、教主と爲す、是れ性海如實の無盡の法門を説く教主なればなり、然も亦始本不二の佛なることを表する爲め、行境を兼ねるや勿論なり、若し夫れ普解境のみを取らんか、修因感果の義顯現せず、依て因果相對を表して、解境に、行境に兼ねしむるものなり、然るに此の問題は異論のある所にして、或は行境を以

て教主とし、所尊とし、或は解境を以て教主とし、所尊と爲すものありて、甲論乙駁たり、然れども華嚴一家の正説とする所は、略ぼ上述せしが如く、解境を以て主とし、兼ては行境に通ずるものとす、此等に關する變遷並に華嚴佛身説に就て起れる、主要なる問題は以下順次述ぶる所あるべし。

第二節 本經及世親の佛身論

十身説の經文

盧舍那は譯して、光明遍照と云ひ、毘盧舍那は譯して、遍一切處と云ふ、華嚴家は之を解して梵音の具略と爲し、共に十身具足の法身佛と談ず、然るに盧舍那、毘盧舍那の語は新舊譯の兩經に、度々繰り返へされたりと雖も、未だ直に此の佛を十身具足とし、將た亦解境、行境と斷定するものあらざるなり、是れ後世華嚴諸祖と他師とが、本經の佛身に對する見解を異にする所なるべし、今華嚴家に於て十身説を鼓吹せし淵源を本經に求むるときは、左の文を發見すべし。

是菩薩知衆生身、知國土身、知業報身、知聲聞身、知辟支佛身、知菩薩身、知如來身、知智身、知法身、知虛空身、乃至若於衆生身、作國土身、業報身、乃至虛空身、若於國土身、

作已身、業報身、乃至虛空身云々。

(六十華嚴二十六卷十地品)

佛子、菩薩摩訶薩、知分別説十種佛、何等爲十、所謂正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、化佛、法界佛、心佛、三昧佛、性佛、如意佛、佛子是爲菩薩摩訶薩、知分別説十種佛。

(六十華嚴經三十七卷離世間品)

融三世間の義蘊在す

此の中、十地品は解境の十佛を説き、離世間品は行境の十佛を説く、而して十地品に於ては、如來身に亦十身を説く、謂く菩提身、願身、化身、力持身、相好莊嚴身、威勢身、意生身、福德身、法身、智身、是れなり、此れ離世間品に列する所の十身と全く同一にして、此の二處の十唯、是れ一體なり、是の故に並に行境の十身と名くべきなり、然り而して、吾人は十地品解境十佛に關する文に於て、衆生身に他の九身を攝し、國土身に他の九身を攝し、業報身乃至虛空身に各々他の九身を攝するを見るべく、又文に説て是菩薩遠離一切身相、分別得平等と云ふが故に、三世間融攝することを認むべきなり、是れ實に華嚴家か融三世間を談ずる着眼點にして、然も其の則りを世親に取りしや明かなりとす。

世親は之に就て如何に解釋を加へられし歟、世親は衆生世間器世間、智正覺世間を

世親に義存するも未だ文なし

總じて淨佛國土分と爲し、以て三自在行を明すとせり、即ち衆生身、國土身、業報身を染分とし、聲聞身已下法身に至る六身を淨分とし、虛空身を不二分と爲し、然も共に融じて淨佛國土とし、且つ無碍を顯示して自在と云へり。即ち『十地經論』に左の如く述ぶ。

衆生身等染分淨分不二分、乃至衆生世間、器世間、彼二生因業煩惱是染分、三乘是淨分、此三乘隨何智隨何法彼淨、顯示虛空是不二分、乃至淨佛國土三自在行已說。是に依りて見れば、世親に於ては三世間融攝するの意を説くこと確かなれども、未だ成文的に融三世間十身具足是れ即ち舍那佛なりとは明言せざるなり、之れ後來支那に於て、華嚴家が一經の文義並に其の教理より推して直に是れ毘盧舍那法身佛なりと断定するに至れるものなり。

### 第三節 南北朝時代の佛身論

十身説顯れず

經論に於ける十身説は、其説明縱容不迫なるが故に、舍那佛を以て直に十身具足の法身佛とは容易に認容し能はざる止むなき所なり、是を以て支那南北朝時代に於

南地は單の化身  
北地は單の報身

て、華嚴を講布せし諸師、舍那佛を解するに、皆通説を以てし、未だ一家に説くが如く十身具足なることは、夢想だも想倒せざりしなり。

抑々華嚴經の講布たるや、主として支那北地に於て行はれ、南地に於ては其講布甚だ揚らず、彼の三大法師の如き、未だ此を講せず、其の之を講する攝山より始り、與皇に至りて大に斯典を弘通するに至れり、然して南北兩地の諸師、華嚴佛身説に關して其説を異にするに至れり、即ち南方諸師は、舍那佛、釋迦佛は共に化佛にして同一なりと爲し、北方諸師は法報化の三身を立て、舍那は報佛、釋迦は化佛にして、法佛は説法せずと爲し、以て舍那、釋迦の異身なることを主張し、報佛説を鼓吹せり、此間の消息を詳細に説明せしものは、天台大師と同時代の後輩者たる三論宗の祖嘉祥の『華嚴遊意』是れなりとす。

南方解云佛敎凡有三種、謂頓漸不定也、乃至是釋迦佛一期出世始終有此三敎若使如此故知、華嚴是釋迦佛説也云々。

北方論師解彼有三佛、一法二報三化、華嚴是報佛説、涅槃般若是化佛説、法佛則不説、彼判舍那是報佛、釋迦是化佛、舍那爲釋迦之報、釋迦爲舍那之化、華嚴經是舍那

佛説、此則是南北兩師釋如此也。

(華嚴遊意二丁)

此の化身説、報身説に關して、賢首大師も亦『探玄記』に叙して曰く、

有人釋云、是化身佛以善提樹下八相成道是化身故、不離昇天是重化故、以釋迦異名名盧遮那、非別報身故、又有釋云、説此經佛是實報身、以是盧遮那法界身故、居蓮華藏淨土中、故下第七會初歎佛具彼二十一種殊勝功德是實報也、但以不離化故談此樹下、非是化身。

(探玄記卷二十九)

彼の天台も亦華嚴佛身に關しては、前に一言せし如く、報身説を主張し、未だ融三世間十身具足の法身佛なることを説かざるなり。

天台も報身説なり

#### 第四節 華嚴各祖の佛身論

三身説を以て律すべからざる理由

南北朝に於る諸師の見解夫れ此の如し、若し夫れ諸師の見を以てする時は、一經中、十信及び三賢等を説くものは、地前の所見なれば、決して報身佛の説と爲すべからず、又華嚴世界に居住するを以て決して化佛なりと談すべからず、隨て二説共に失あるや明かなり、加之經中に於ては、報化に異りたる國土身等を説くを以て見れば、

決して通佛教の三身説等を以て、華嚴の佛身觀を論ずること能はざるや勿論なり、果然賢首大師、此の點を論究して、

今釋此佛是十佛之身通三世間、以説十信及三賢等地前所見非實報故、然居華嚴非局化故、國土身等非前二故、具攝前二性融通故、具足主伴、如帝網故、是故唯是周遍法界十佛之身。

(探玄記卷二十九丁左) 文義綱目十六丁左

と云ひ、以て華嚴佛身は、融三世間十身具足の毘盧舍那法身佛ならざるべからずとせり、其の大意は既に佛身説梗概に於て述ぶる所ありしを以て、此に重説するを避け、已下少しく祖師の交渉點に就て説くこととせん。

抑々華嚴佛身説に關して、本經の深旨を闡明し、世親の幽微を發揮して、此に二種の十佛義を説けるもの、第二祖智儼是れなり。

若一乘義所有功德皆不離二種十佛、一行境十佛謂無著佛等如離世間品説、二解境十佛謂第八地三世間中佛身衆生身等具如彼説。

(孔目章二四丁)

如此解境行境二種の十佛を説きしも、若し夫れ華嚴教主舍那佛に關しては、主として行境の十佛と爲すを見るべし。

至相は主として行境を説く

果者謂自體究竟寂滅圓果十佛境界、一即一切、謂十佛世界海、及離世間品明、十佛義是也。  
(十玄門一丁)

賢首は主として解境を説く

此の外、五十要問答初卷初丁に於て、一に十佛及び名義と題して、離世間品に於ける行境の十佛を説けるもの、如何に師が舍那佛を解するに行境を以てせしやを知るに足るべし、是れ實に因縁相對して、修因感果の道程を示す爲めなり、然るに第三祖賢首に及びては、法界無盡緣起の玄底を叩き出して、直に解境の十佛なりと論究せられたり、即ち前に擧げたる『探玄記』には、佛身を定むるに、十地品に於ける融三世間の十身佛を以てし、又『五教章』等、皆解境を以て釋せられたり。

此一乘要是盧舍那十身佛及盡三世間説、不同三乘等變化身及受用身等説。

(五教章上之三六十一)

如此融三世間の解境を以て主とするも、解境十身中の如來身の行境の十身を攝するが故に、行境十身を兼ねるや、もとより其處なりと云ふべし、後に第四祖清涼の佛身觀を見るに、師は先づ佛身を説いて、夫れ眞身は寥廓として、法界と其體を合し、包羅して外なく、萬化と其用を齊ふすと云ひ、以て法身佛なることを標し、次に報佛化

佛に局るべからざることを論じて、十身説を出して云く、

一約融三世間爲十身者、一衆生身乃至十虛空身、二就佛上自有十身、一菩提身乃至十智身、廣顯其相如第八地及離世間品辨。  
(華嚴玄談三八)

清涼は主として法身説法の義を述ぶ

と云へり、然るに師が此に融三世間の十佛と、佛身上の十身とを並べ出し、解境行境の言を出さるもの、大に注意すべき要點なりとす、學者或は直に之を解境行境を以て解すと雖も、之れ甚だ思はざるの淺見なりとす、義を以てするときは、勿論解境行境に配すべし、然れども師が一言の此に及ばざる者、他に大々の理由あればなり、即ち師は今法身説法の深義を鼓吹せんが爲め、二種の十佛を體性に約して説き、且らく解境行境の言を省ける者とす、故に此の二種の十身の次に、直に十義の無碍を擧げたり、而して此の十無碍中に於て、或は報身化身の無碍を論じ、或は依報正報の無碍を説き、最後に圓通無碍を明すに及びて、佛身の理に即し、事に即し、一に即し、多に即し、三身に即し、十身に即することを説明せり、然り而して師は更に三身十身融攝の義を詳説して云く、

三身即十身者、若以佛身上十身者、菩提身願佛化身力持身意生身即三身中化身



攝也、相好身威勢身福德身義通報化、法身即法身、智身義通三身、局唯法報故即三  
是十即是三、若約融三世間十身、即三者如來身通三身、智身亦通三身、法身虛空身  
即法身、餘六通法化、法身體故隨物應國土等故。  
(華嚴玄談<sub>三十五</sub>左)

之れ十身具足の法身佛は佛說菩薩說衆生說刹說にして一として說法せざるもの  
なし、此の十身なるもの三身に即し相融攝す、從て法身佛の說法たるや、理として否  
定すべからざるものと結論するの意なり、故に師は之を總結して同一無碍の法界  
身雲なりと云へり、されば佛身には、四法界を含みて具せざる所なく、即せざる所な  
く、一法として佛身に非らずと云ふことなく、從て報化二身はもとより法身佛に至  
るまで、說法なしと云ふべからざるなり。

蓋し佛身に就て、十無碍を論すること、賢首の『華嚴旨歸』<sub>六丁</sub>を受くるが故に、勿論  
賢首に於て如上の義を存するは明かなれども、清凉は特に法身說法の義を詳論す  
る所以のもの、天台、嘉祥、慈恩等皆法身說法を許さず、殊に清凉の時代は荆溪の出づ  
るありて、三身相即を談するも、法身說法の義に至りては、之を認容せざるが故に清  
涼之に抗して大に我宗風を顯揚せんが爲め、盛に法身說法の理を論證するものと

云ふべし。

第五節 宋朝四家對善靈佛身論

其れより降て、宋朝の四家即ち道亭、觀復、師會、希迪は共に、解境は尙是れ比量智の所  
緣なるが故に可說なり、行境は即ち無分別智の所觀なるが故に不可說なり、然るに  
今『五教章』に教主を説くものを見れば、果分不可說十佛自境界と云ふが故に、行境  
の十佛たるや明なりとするにあり、今姑く道亭の說に徴すれば、

十佛者、成正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、涅槃佛、法界佛、心佛、三昧佛、本性佛、隨樂佛等  
究竟自證不對機緣、卓然獨得自境界歟。  
(五教章義苑<sub>一五</sub>丁)

解境を以て可說とし、行境を以て不可說となし、終に佛身上の十佛を以て、果分不可  
說となすもの、儼藏二祖が解境を以て佛智所照の境とし、行境を以て修因契果の道  
程を示すものなりと爲すの意に、一變態を呈せしものなるや明なり、蓋し道亭は搜  
探二書を見ずして、晉清凉圭峰二祖のみに依りしがゆゑ、往々異說を唱へたる點少  
しとせず、是を以て師會は復古を著して、至相の古に復せしと雖、未だ五祖の同異、時

四家の行  
境不可說  
解境可說  
の異說

壽靈の正  
義直寫

運の通塞を知らざるを以て、祖意に違ふ所あるを免れず、之を要するに、宋朝の四家が佛身に對する見解は道亭説の範圍を脱せざるものとす。

之に反して、我國東大寺派の佛身觀たるや、一家の正系を辿り、解境十佛を以て論じ、兼ぬるに行境十佛を以てして、所謂宋朝四家の佛身觀の影響を受けざりしが如し、是れ全く壽靈の功に歸せざるべからず、師は良辨の弟子たる慈訓の高足なりとも云ひ、或は又東大寺草紙に徵すれば、良辨の上足なりとも云ふ、其の何れなるにせよ、千有餘年前の人にして、清涼と殆んど同時代なりしが如し、而して新羅の審祥が賢祖より華嚴の法義を直傳し、我國に渡來して之を良辨等に授けしがゆへ、壽靈の華嚴義は儼藏二祖の教義を直寫せしものと云ふも、強ち誇張の言にはあらざるべし、其後凝然等出づるあるも、皆壽靈の説を準繩とし、之に負ふ所少しとせず、依て此に壽靈の説を照會すること、せん、是れ時代を異にし、且つ互に未知の學説なるも、學説の異同對配するに便なるものあるがゆへ、此に四家對壽靈とはせしなり、乃ち壽靈に依れば、初に行境の十身を擧げ、之に六相をかけて、互に融攝することを説き、次に章主法身章云通攝一切三世間故衆生及器無非佛故等と云へり、是れ即ち行境と

雖も融三世間の十身に通ずるの筆格なりと云ふべく、次に更に自ら卓を叩て云く、案云夫如來法身無障礙融二種世間爲一佛身體、分一佛身爲十佛身、何者十身、一衆生身乃至十虚空身、具如論説、乃至此謂毘盧舍那如來、依正無碍、一多自在、因陀羅網重重無盡、周邊法界不可思議圓滿、究竟十種法身也。

(五教章指事記上本八)

即ち盧舍那佛を以て解境の十身なりとする説なり、從て國土草木地獄叫喚等の聲に至る迄、舍那の説法にして、所謂佛説菩薩説刹説てふ一家の法身説法を鼓吹するものと云ふべし。

### 第六節 鳳德二師の佛身論

斯くして、東大寺に於ける華嚴佛身觀は、正系を傳へて異論なく、後世徳川時代に及びて、鳳潭出づるあるも、此の佛身説に關しては、解境の十身を立て、然も行境に通ずるとなし、頗る賢首の意を得るものあり、然れども師は例の如く清涼が事と理の無碍を根柢として、一切を論究し、佛身説に關しても亦此の筆法なるが故に、慊焉たらざ

鳳潭の正説

るは其處なり、故に清涼を評して、台宗の別理或は山外の計に墮すと駁するに至れり、然も鳳潭が清涼に對する見解は既に所々に論する如く、妥當を缺くものと云ふべし。

普寂の國土身說法の否定

次に普寂は舍那佛に就て、如何なる見解を持せられたる歟、彼の東大寺系統の淡叡が其著『纂釋』に於て、國土身說法を説くを駁して、

纂主不知今宗之洪格也、以如是陋見欲釋今章者、恰如田舍鄙民論紫宸青宮之事、豈可得耶。  
(五教章衍秘鈔一三十一)

と罵倒を加へ、自己の見解を述べて云く、智論、楞伽等三佛說法の相を説き、大乘の經典往々法身自受用身の說法を示すと雖も、之れ初地已上の菩薩が分に此を感得し、八地已上に至りて初めて十身說法を領受する所あるのみ、若し夫れ徧計の情識を以て普賢の智境界を計較せんか、其れ猶芙蓉を焰裏に覓め、萍蒹を水中に尋るよりも難しと云ふべし、且つ夫れ具縛の凡夫は見聞位の分齊なれば、普十身の說法を信得するのみ、焉ぞ十身舍那を見ることを得ん、詳論すれば彼の通途三身説に従へば、三賢は應身を見、地上は報身を見、八地已上は十身融即を見るべく、一乘に據れば則

ち信滿已去に於て十身を見、解行位は此の道を解行し、見聞位は此道を信得するを得て、未だ初めより十身舍那佛を見ることを得ずと論究せられたり、之に據るときは、普寂は國土身說法を否定し、凡夫見佛説を駁撃し去るものと云ふべし、然して其の八地已上に於て初めて見ることを得るの十身佛に關しては、別に解境行境を論ずる所なしと雖も、已上の筆格より推せば、隨に行境に局るの義たるや明なり、是に於て乎、之を『發揮鈔』に徴すれば其意の存する所を伺ふに足る。

問今所歸依指何十佛耶、答行境十佛爲今所敬、至相十玄門引離世間十佛以證果分不可說、斯其證。

問何不取解境十佛耶、答解境乃融三世間十身雖極高妙、是顯普現妙用之十身、故於所歸依其義疎矣。  
(發揮鈔一丁四)

如此普寂が行境十佛を尊崇とするもの、彼の宋朝四家が尊崇するとは其義を異にし、解境行境の意義に於ては謬れる所なしと雖も、八地已上の見佛とし爾も行境に局るもの、至相賢首の眞義を逸出せしや明なりと云ふべし。

行境十佛を主とするも四家に異なる

第七節 戒定の佛身論

風潭の眞言攻撃

彼の風潭が八宗に向て攻撃の矢を放ち、自己の抱負を赤裸々に表白せる中、眞言家に對する一節あり、即ち、

有云、所謂因分可說者顯教分齊也、果性不可說者即是密藏之本分者、噫此亦顯密岐而隔絕、則不如隱顯俱成一門者、何況十支無盡思之。  
(匡眞鈔一丁八)

眞言家の法身說法

之れ正しく弘法大師の『顯密二教論』を駁せしものなれば、忽ち戒定の反駁を蒙るに至れり、而して其の反駁端しなく華嚴佛身論に及べり、依て戒定の華嚴佛身論と云ふよりも、華嚴對眞言の佛身論とも云ふべきものたり、即ち二教論並に戒定に依れば、華嚴經中に不可說の佛果を説くは、縁に對し形待して、因を成せんが爲めなれば、畢竟するに是れ教分の佛にして、決して究竟自在の證分の義佛にあらざるなりと云ふにあ

蓋し眞言の所謂毘盧舍那佛即ち大日如來は、『大日經義釋』第一の初に徵するに、五智五如來を具し、大日は其總體なりとす、而して大日如來の法身佛は衆生所具の理

體と不二一體にして、心外に佛なく、亦淨國なく、心即佛なり、淨殿なりとし、然も亦客觀的佛身を説き、法身說法を認容し、鼓吹す、即ち野山大師の『顯密二教論』上には、二教の區別を説て、他受用應化身の隨機の説之を顯と云ひ、自受用法性佛の説き給ふ内證智の境を秘と名くるなりと説き、次に、

問應化身說法諸宗共許、如彼法身無色無像、言語道斷、心行處滅、無說無示、諸經共說、斯義諸論亦如是談、如今何爾談法身說法、其證安在乎、答諸經論中往々有斯義、雖然文隨執見、隱義逐機、根現而已、譬如天鬼見別人鳥明暗、

(合刻袖珍十卷章六丁)

と云ひ、已下委しく法身說法の義を論せり、然れども此に云ふ法身は、通途の所謂三身中の法身にして、決して華嚴の云ふ如き、十身具足の法身說法にはあらざるなり、今之を文に徵すれば、

三摩地法者、自性法身所說秘密眞言三摩地門是也。

(同上丁十)

若依瓔珞經、毘盧舍那是理法身、盧舍那則智法身、釋迦名化身、然則是金剛頂經所談、毘盧舍那佛自受用身所說、內證自覺聖智法者、此則理智法身之境界。

(同上九四丁)

此經明說三身說法差別淺深成佛遲速勝劣與彼楞伽三身說法相義合顯學智人皆導法身不說法此義不然。

(同上五丁)

如此法身說法を立つるも其法身たるや所謂法報應中の法身佛なること、『二教論』に於て明なり此を以て彼れ戒定が、

賢首宗立一大法身說法爲圓教三身四身皆各說法爲三乘終教大異乎諸宗然則我大師成立法身說法唯對天台師以下也賢首家終圓即我黨故猶如賢首攻始教不融不譏終教等也。

(五教章帳祕錄一丁四)

同じく法身說法と云ふも二家大に異なる所あり

と云ひ法身說法を立つるは獨り華嚴家並に言家に局り然も言家を以て華嚴より高尚なるものと説くも焉ぞ知らん言家の法身說法は通説の法身佛說法にして所謂其法身佛は法性の理佛なることを之に反して華嚴家の立つる法身佛は三身四身説を超絶したる融三世間の法身佛にして事佛たり故に佛説菩薩説衆生説刹説時説にして此に恆説普説の華嚴經なることも成立するを得る底のものたり彼れ言家が通説の法身說法を成立せんとするも既に法身理佛が說法と云ふ事法を其

華嚴の法身説は萬有教の極致を示す

儘爲すこと説明に於て大に難事とする所あるを免れず是に於て乎終に覺鑿興教大師の如き法身佛一等地を下り加持門に於て說法せしなりとの義を立て新義眞言宗を分立せしに至りしに徴しても亦明なりとす。

第八節 結論

夫れ融三世間の十身具足の法身佛たるや是れ理佛にあらずして事佛なり然れば單の事佛にあらずして三身を融即し三世間を融攝し十身を具足したるものなり即ち周遍法界無碍の一大法身にして所謂佛説菩薩説刹説衆生説三世一切説なれば自ら法々塵々に遍し宇宙一切の森羅萬象若し夫れ佛説を以て取れば則ち一切是れ佛乃至猫鼠鳥雀風籟波響悉く是れ十身毘盧の說法なり賢首大師其の普通の相狀を説きて、

謂此身雲則作一切器世間經云或作日月遊虛空或作河池井泉等一切世界海又亦潛身入彼諸刹一一微細塵毛等處皆有佛身圓滿普遍。

(華嚴旨歸丁)

と云へるもの云何に其の普遍にして然も無碍の事佛たることを知るに足るべし、

抑々佛教は萬有教たること異論なしと雖も、多くは此れ皆理性の上に於てのみ論ず、從て宇宙觀的には法性を以て論じ、人生觀的には法身佛を以て極度として説明す、即ち皆之れ理の上に於て究明するのみ、顯現の森羅萬象を理に攝して説明するのみ、之に反し華嚴に於ては萬象の事法其の儘を取て、無碍を談するが故に、一層直截にして適切實に萬有教の眞髓を得たるものと云ふべし、萬有教の眞實極度の説明は華嚴に於て始めて見ることを得るなり。

斯く融三世間十身具足圓滿無碍法界身雲の佛は本より生佛不二なれば、衆生も佛なり、舊來成佛なりと雖も、若し此の自心眞性の佛を客觀的に顯現し拜見せんとせば、強ち因果不二の高理に沈醉すべからず、高談すべからざるなり、彼の普寂が所謂八地已上の見佛説の如きは、決して奉すべからずと雖も、一家の規定の修養法に關しては、細心を以て之を守らざるべからず、其の修養の高低深淺により法界身雲の佛は種々に顯現するものなり、即ち餓鬼畜生修羅人天三乘一乘の機根に應じて、佛身は種々に顯現すべし、宛も虚空が其體に於て差別なきも、器の大小に隨て大小を現する如く、法界身雲の佛も此を感じする智の淺深に依りて、此に一部分乃至全部

策勵修養  
を忽にす  
べからず

分を感じし得るものなり、然れば我等は終日其中に衣食し起臥するも、佛身を見ず知らず聞かざること、宛も雷電地を振へども聾者は聞かざると同じきが如きは、未だ修養の效を積まざるが致す所なれば、發憤するなくして可ならんや、此に於てか、性起品に體性の平等を説き、然も其の上に其が達觀の要を説き、又清涼「大疏」四十八七丁に、夫欲悔過須識逆順十心、先識十種順生死心、以爲所治として、十種を擧げ、次に十種の逆生死心として、出離得脱を説くもの、言直に見佛に就かざるも、頗る味ふべき言なりと信す矣。

#### 第四章 佛土論

佛身の存在を認めれば、此に其の必須條件たる所住の國土を論せざるべからず、換言すれば佛の化益を施す國土なくんば、佛身の存在を説くも、畢竟するに、無意味なればなり、然して今華嚴に於ける見解を説明するに先ち、一應諸教の之に對する解釋を試みんとす、之れ一家の佛土論は、諸教のそれを絶對に否定せざるのみならず

小乗の見

す大に容るゝ所なればなり。  
 先づ小乗薩婆多部の説に依るに、宇宙の構成は三千大千世界より成るものにして、一須彌山世界を千個集めたるものを小千世界と稱し、小千世界を千個合したるものを中千世界と云ひ、中千世界を百個合したるものを大千世界と云ふ、此の廣大なる世界を總稱して三千大千世界と云ふなり、從て此の娑婆三千界には百億の須彌山存し、一須彌世界毎に釋迦佛存在するものと爲す、而して現今吾人の住居する一須彌世界は三千界の中央に位し、釋迦報身の出世し化を垂るゝ所にして、其他の須彌世界は釋迦化佛の住する所とす、如此娑婆三千界を佛國土と爲すが故に、瓦礫荆棘の穢土にして凡聖同居なるは勿論、假ひ報佛の土なりと云ふも、只之れ所依所住の土にして、大乘的の所謂修因感果の酬報土の意にあらざるのみならず、亦三界外に淨土を建立するものにあらざるや明かなり。

始教の見

次に始教に於ては、前の如く一娑婆三千界に限らずして、實に千の三千界を認め、之を娑婆世界と爲せり、而して此の千個の三千界に充滿する釋迦は皆化佛にして、二乘人天を化益し、其の報身佛は三千界毎に一佛づゝ存在し、十地の菩薩を化益する

ものとす、之れ所謂摩醯首羅天即ち大自在天と稱する他受用報身の淨土にして、色界の最上たる第四禪天にあるものとす。

梵網經云、我今盧舍那方坐蓮華臺、已上自受用、周匝千華上復現千釋迦、千大自在天、一華百億國、大釋迦化境也、一國一釋迦、小釋迦、各坐菩提樹、一時成佛、道如是、千百億、盧舍那本身也、實成、千百億釋迦也云云。

摩醯首羅天上有、一實報成佛、以一大千世界爲所緣境、化作百億釋迦、一時成佛云云。

(入大乘論下卷十五)

釋迦の化を垂るゝ國土、如此廣大に説くと雖も、元より娑婆三界内を出でざるの説明たり、而して此上に尙理想的淨土を建立せり、即ち自受用報身の所居土なり、此は無漏の第八識大圓鏡智の變する所にして、廣大無邊の國土、七寶莊嚴の淨土にして、十地の菩薩すら之を知見し得べからざる、所謂唯佛與佛の境界に屬するものなり、又法身佛の淨土に關しては、法身佛已に眞如の理體なるが故に、其淨土も亦眞如を以て所依の國土と爲す、故に此の二種の淨土は化益に關係なきものなること明かなり。

終教の見解

次に終教に於ては始教にて娑婆世界の無限を説明せんとして、未だ有限的の説明たるを免れざるに反し、有限を脱して無限の域に想到せり、之れ思想發展の然らしむる所にして、實際此の宇宙は廣大無邊にして、百億に限るべきに非ず、千の百億にも限るべきにもあらず、將た亦云何なる教を以て説明するも不可なり、此に於てか果然龍樹は『大智度論』に説て云く、

三千大千世界名一世界、二時起一時滅、如是等十方恒河沙等世界是一佛世界性、如是一佛世界數如恒河沙等世界是一佛世界海、如是佛世界海數如十方恒河沙、世界是一佛世界種、如是世界種十方無量、是名一佛世界、於一切世界中取如是分、是名一佛所度之分。  
(智度論第五十一)

此の廣大無邊の娑婆世界を總じて化土と爲し、釋迦化身佛の出現する所と爲す、如此娑婆世界の廣大無邊を説明するもの、世界宇宙の説明としては最早之れ已上に其の廣大を説くべからず、其の無邊を説くべからざるなり、彼の泰西科學者が現實の宇宙を説明するものを見るに、一太陽系に入大遊星あり、吾人の生棲する地球は其の一に屬するものなり、而して此の一太陽系を以て一宇宙を構成するものとす、

之れ宛然小乗の三千界の説明に似たり、而して彼等尙研究を進むるの結果、一大宇宙は決して一太陽系を以て構成せらるゝものに非ずして、無數の太陽系存在し、然も皆「ハークユール」星座に向て幾分か移動するものと爲し、其の廣大無邊測知し得べからずと云ふもの、終教の談に近似せる所なしと云ふべからず、然りと雖ども宗教を以て立ちし佛教たるもの、當此れのみにして甘するものにあらず、娑婆三界の廣大無邊を説き盡せしもの、此れ已上に説明せんとせば、勢ひ三界已外に淨土を見出さざるべからず。

涅槃經云、善男子、西方去此娑婆世界、度三北本、作四十二恒河沙等諸佛國土、彼有世界名曰無勝、彼土何故名曰無勝、其土所有莊嚴之事、悉皆平等、無有差別、猶如西方安樂世界、亦如東方滿月世界、我於彼土出現於世、爲化衆生、故於此界閻浮提中、現轉法輪。  
(南本第二十二、二十七、丁右、德王品、北本第二十四、二十三、丁左、德王品)

終に三界已外に無勝莊嚴世界を建立し、釋迦實報身の淨土なりと爲すに至れり。次に頓教に於ては、娑婆三界の無邊を説き、然も三界已外に理想的莊嚴の淨土を建立せし終教説は、子細に檢し來れば衝突する所なしと云ふべからず、一方に無邊を

頓教の見解



説きつゝ、爾も無邊已外に淨土を建立するもの、一方を是とすれば一方は非にして何れかの一方を否定せざるべからず、即二者相兩立するを許さざるものなり、此に於てか頓教は如此有形的の國土あるを説明せざるのみならず、此を念頭に置くすら已に眞理に違するものにして、且之れ無相離念の法身土あるのみと主張するに至れり。

次に同教に於ては無相離念として消極的に念を斷ち口を閉づれば則ち止む、苟も之に向て解決を下し、眞義を表象せんとするには、勢ひ積極的に之を説明すべきなり、此に於てか説て云く、此土を離れて界外に遠く淨土を求むるに及ばず、穢土即ち淨土、淨土即穢土なり。

法華經云、於阿僧祇劫常在靈鷲山及餘諸住處、衆生見劫盡大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、乃至我淨土不毀而衆見燒盡。

と云へるもの、靈鷲山の穢土を以て直に淨土なりと爲すなり、是れ穢土を離れ、穢土已外に淨土を求むるもの、換言すれば三界已外に淨土を建立せしむるものが、娑婆界と淨土界とを土界相接せるものと爲し、爾も其の何れをも皆廣大無邊なりと談

同教の見  
解

別教の見  
解

せんとして、其思想衝突せるに對し、明に其調和を致せるものと云ふべし、即ち穢土も淨土も其土體を別にするものにあらずして、只感見の云何に依るものにして、悟者は之を淨土と見、迷者は之を穢土と感じ、覺者は之を妙刹と知り、不覺者は之を火宅と思索するに外ならず、如此淨穢不二を談り、迷悟二者の感見に由るものと爲すに至り、此に始めて二土に於ける衝突、相調和するに至りしことを知るべし。

後に別教一乘に於ては、十身具足の釋迦法身説を理想とするか故に、彼の同教が三身説を立て、淨穢不二の説明を以て満足するに甘せずして、又別教特有の佛土を建立す、然るに佛自境界は果分不可説なるが故に、實は吾人の之を心に浮べ之を口に出すべき底のものにあらずして、所謂吾人の意識界已上のものなり、故に賢首『五教章』に説て、十佛境界所依有二、一國土海圓融自在當不可説と云ふもの是れなり、然るに若し之を因分可説に下して説明し、因人をして領解せしむる所なくんば、教化を垂るゝに由なし、故に次に二世界海有三類、一蓮華藏莊嚴世界海、具足主伴、通因陀羅等、當是十佛等境界、二於三千界外有十重世界海、一世界性、二世界海、三世海界輪、四世界圓滿、五世界分別、六世界旋、七世界轉、八世界蓮華、九世界須彌、十世界相、此等當

是萬子已上輪王境界三無量雜類世界皆遍法界如一類須彌樓山世界教量邊畔即盡  
 虛空遍法界又如一類樹形世界乃至一切衆生形等皆亦是悉遍法界互不相碍と説  
 明を爲せり又『探玄記』卷三四同五にも同様の説明を與へられたり之に依り  
 て見れば一重の蓮華藏世界は同教の分齊にして十蓮華藏世界こそ正しく別教一乘  
 の淨利なること明かなり然るに三千界外に十重世界を立て或は雜類世界を論ず  
 るもの十蓮華藏世界と云何なる關係を有するや將た亦蓮華藏世界とは云何なる  
 意味の淨土なりや更に此等に就て説明すべし。

蓮華藏世  
界の名義

蓮華藏世界之れ實に華嚴一家の理想的淨土なり十身具足の毘盧舍那法身所領所  
 居の國土なり法界に悟入するもの住すべき淨利なり抑々蓮華藏界のこと本經  
 第一卷世間淨眼品を始めとし殊に第三舍那品に於て度々華藏世界の名稱繰り返  
 さる之れ蓮華には種々の徳を具し藏は所謂含藏を意味し海は深廣具徳の兩義を  
 有するを以てかゝる世間の殊勝なるものに寄せて此に蓮華藏世界を標榜せしめ  
 のなり。

各祖の説  
明

華嚴各祖が之に對する説明を見るに至相は『孔目章』卷一八に世界海を分て三と

し一雜類世界二十世界三華藏世界の順序を以て説明し又國土海に就て説く所あ  
 り寶首は之を『五教章』に受て因果二分の分齊を明白にして果分不可説因分可説  
 に分て説明せり之れ所謂向下的説明にして緣起建立の格に依りしものなり降て  
 清涼宗密に至りては別に國土海果分不可説のことを説かずして直に世界海の三  
 類に就て説明し然も三類の順序皆雜類十世界華藏世界とせり之れ即ち行門爲本  
 の格に則りしものと云ふべし然れば則ち各祖其の説明に於てこそ多少の異同あ  
 れ世界海を三類に分て一家の佛土論を樹立すること其の規を同ふすることを知  
 るべし。

然らば此の世界海の三類は云何なる意味を有する國土なりや之れ必然起るべき  
 問題なるべし先づ蓮華藏世界は淨穢不二の一相孤門的の淨土に止まらずして主  
 伴を具足し因陀羅網重々の國土に通じ一切諸教諸佛の國土と雖も華藏世界中の  
 ものにあらざるものなきなり是に於てか彼の釋迦正覺を成せし印度摩伽陀國尼  
 連禪河の側なる漚樓頻聚落即ち木瓜林中の菩提樹下が即ち華藏世界中のものに  
 して衆寶莊嚴重々無盡の國土なりと云ふべし次に十重世界は已に三千界外と云

蓮華藏世  
界

十重世界

雜類世界

ふを以て見るときは、娑婆三千界は有限の國土なり、故に今は無邊を意味して三千界外と云ひ、且つ十重の世界あることを説て、次第に其廣大無邊なることを知らしむるものと云ふべし、後に雜類世界とは無量の世界存在し、其一々の世界も亦無量なることを説明するものにして、『探玄記』三<sub>五</sub>に委しく説明を爲せり、其中衆生形世界に就て、謂有二義、一有世界似衆生形、二即種々衆生皆是世界、如身中八萬戶虫各有九億虫等、此即是世界、と云へる中、第二義の如き、衆生の一身中に八萬の住所ありて、八萬の虫類棲息し、其一々に各々九億の虫棲息するを以て、此等の虫類より云ふときは、衆生の一身即是れ一世界なりと云ふべきなり、如此世界の一切の方面に亘りて觀察するとき、は無量の世界存在することを知るに足るべし。

三類世界の關係

上來吾人は略して三類の主要を説明せり、依りて順序として此に其關係に就て説明する所あるべし、則ち賢首『五教章』下四<sub>三六</sub>に此上三位並是盧舍那十身攝化之處、仍此三位本末圓融相收無碍、何以故、以隨一世界即約麤細有此三故、其意蓮華藏世界は之れ本なり根本なり中心點なり、他の二は末なり枝末なり、然れども之れ其體を異にするものにあらずして、且麤細に約して三の別を論ずるのみ、元より國土

三類の區別は機の感見

の體を別にして存するものにあらず、故に雜類世界のまゝ之れ華藏世界なり、十重世界のまゝ之れ華藏世界なるものなり、是を以て華藏世界は邊のまゝ無邊といわれ、又無邊のまゝ邊と云はるゝ所あり、『探玄記』三<sub>十九</sub>に華藏界是邊無邊不二故、名無邊、如下説、無邊邊不二故、名有邊と、即ち華藏世界は邊を壞せずして恒に無邊なり、無邊を破らずして恒に邊なるものなり、若し邊無邊不二の義に背く淨土ならんか、是れ未だ法界緣起の妙理に達せざる者流の言なるのみ、賢祖譬喩を以て巧に之を説明せり、今其の要を摘示すれば、一の錦窠は法海土の如し、此の錦の織物中には白糸紫糸等ありて綾を爲す、即諸糸相由り相成じて錦を成じ、諸色を離れて錦あることなし、今亦爾り、諸國土を離れて法界土なし、諸國土淨穢皆相依相成して一大法界土を構成す、此の一大法界土即ち蓮華藏世界なるものなり、と云ふにあり、是を以て一一の世界十方の塵道皆之れ條然として混せず、爾も融攝無碍なれば中邊即無中邊、方處即無方處なりと云ふべし、故に一切の國土華藏世界のものにあらざるはなきなり、只麤細分別して三類を説く而已、然らば如此三類を説く所以のものは何ぞや、諸祖の説明に徴するに、先づ至相『孔目章』一<sub>八</sub>に成上三、但爲引機淺深、不同途有

三別と云ひ、又『探玄記』三<sup>四</sup>丁<sup>十</sup>には雜類世界、十重世界、蓮華藏界の次第を以て説明し、後に論じて云く、

三乘三中、初二通有凡夫二乘及地前菩薩并佛化身居也、後一初地已上菩薩及佛報身居也。

一乘三中、多分論時、初見聞位、次解行位、後得果位、通即可知、三處佛身同是十佛也。と云へり、清涼は『大華嚴略策』<sup>十一</sup>に其意を受て、

圓機圓修方造其境、然隨機隱顯淨穢虧盈、稱物淺深大小互現、雖虧盈而淨穢交徹、雖大小而通局相融、識智度量、言豈能盡。

とするもの、實に機類の感見によりて如此差別を生ずるものにして、若し之を三生に配せんか、雜類世界は見聞生の感見する國土、十重世界は解行生の感見する淨土、蓮華藏世界は證入得果の感見する妙刹なりと云ふべし、如此機に從て淨穢の區別を爲すと雖も、本より其體に於て別存し相碍ふるものにあらざること、諸祖の文之を證して又疑を容るべきの餘地なしと云ふべし。

蓮華藏界を華嚴一家の理想的淨土にして、廣く諸教諸佛の淨土をも是認して、華藏

一家の理想淨土は蓮華藏世界なり

極樂世界の交渉

界中の妙波瀾と爲し、機の感見に應じては之を種々に感得するものなることを知る、從て華藏界を離れては他の云何なる國土も存せざるなり、吾人の其の之を知らざる所以のもの、華嚴一乘に入て佛知見に悟入せざるの失のみ、要するに行布差別門より觀し來れば、十方世界森々羅々として存し、圓融相即門より觀察せば、十方法界を盡して華藏世界にあらざるものなく、主伴圓融門より云は、華藏は主なり、餘は伴なり、伴は主に即せられて圓融相即し、諸佛の土諸趣の土悉く皆華藏世界ならざるはなく、因陀羅網境界門より云は、塵々皆無量無邊の國土を具し、其中の一々の國土亦無量無邊の刹海を具し、帝網世界を成じ、十蓮華藏世界たり、之れ實に華嚴一家の理想的淨土なりとす。

華藏界を根本義として無邊を談すと共に、西方淨土を基本として十方無邊を談するとは且らく相一致せざるもの、如し、此に於てか端なく兩界の關係云何を論せざるべからざるものあり、其の之を論究せんには平等差別の二方面より觀察すべきを至當とす、即ち佛々所證平等是一の方面より論せば、彌陀の土即毘盧の土にして、彌陀より云は、彌陀の淨土たるべく、毘盧より云は、毘盧の妙刹たるべし、故

に毘盧の十方世界を取て華藏を嚴飾するもの亦彌陀取て極樂淨土を莊嚴し、二者決して相障礙せずして、毘盧は毘盧の嚴土を成じ、彌陀は彌陀の淨土を建立し、各々別嚴の淨土を建設して、然も同時に十方無邊なることを得べきの道理此に存するなり、然れども修因酬報の差別の方面に就くときは、彼此の佛修因の差、感果の別なかるべからず、故に彌陀の淨土其まゝの莊嚴を取て直に毘盧の嚴土とは説くべからず、已に嚴土差別ありとせば、吾人の修因感果の方法亦差異なきを得ざるなり、即ち土體差別とは何ぞや、云く此の華藏界は毘盧舍那佛の土なりと云へども、衆生身は法性を體性とす、而して此の衆生の性其のまゝ、毘盧の果界性なれば、其の土體も亦生佛の別なく、一法性平等性なり、故に華藏世界の相と觀するもの、自ら本性を觀するに外ならず、隨て華藏に入らんとするは只之れ自己の心性に悟達するのみ、毘盧舍那佛を拜せんとするも、本來自己智性の佛身を拜なるに外ならざるべし、如此觀察し來れるときは、因智は果智と合一し、生佛冥合し、周徧法界の法性に體達することを得るなり、生佛平等の法性界之れ華藏界なることを眞に悟れば、足るなり、然るに淨土門に於ける彌陀極樂界は然らず、全性修起の果智別途不共の誓願ありて、

超然たる淨土を建立し給へり、勿論衆生の體性を該羅せるに相違なきも、衆生の性其のものを取て、直に土體とせしにあらずして、彌陀修因顯現の性たり、即ち通性的理性を彌陀の願力に由りて、能く此を別性的智性に精練し、土體と爲せしものなり、故に一に只之れ彌陀果海の徳相にして、衆生の性は一として之を認むべきなし、故に吾人は罪業深重のものなりと信機し、彌陀願王のみ攝取して、淨土に往生せしむるものなりと信じて此に到達することを得るなり。

## 華嚴大系 大尾

大正四年十月五日印刷  
大正四年十月十日發行

華嚴大系 附



定價  
貳圓參拾錢

著者 湯次了榮

京都市五條通東洞院東入

發行著 下村卯之助

京都市北小路通新町西入

印刷者 須磨勘兵衛

京都市北小路通新町西入

印刷所 弘文社

發行所

京都市五條通東洞院東入  
振替口座大阪七一九番

法林館



佛教大學講師  
湯次了榮師著

(新刊出來)

# 漢和 大乘起信論新釋

全一冊 洋製  
全三百餘頁  
定價 金壹圓  
郵稅 八錢

本論は大乗佛教を學ぶ者の必ず先づ繙くべき典籍にして組織整然、論旨簡明なる事他に比類なき寶典也、然るに本書には義記、會本の刊行書少からず雖、直に本論のみを講習せんとするに當ては、適當の良書甚だ缺乏せり、本書は之れが需用に應ぜんが爲、平易にして詳細なれば教科書となり、参考書となり、通俗講話用を兼ねたれば初學者には缺く可からざる良書、是非速かに一本を座右に備へられん事乞ふ。

司教 湯次了榮師述

(第三版出來)

# 因明本作法講義

洋裝 美本  
定價 七拾五錢  
郵稅 八錢



324

468

終

